

民報あばしり

NO.880

2012. 8. 19

発行所

日本共産党
網走市委員会
網走市北八西三
四三二一四四五八
F 四三二一四四五七

無謀な戦争の惨害を繰り返さぬために

日本共産党網走市議団の飯田・松浦両市議は、川向ベーシック前、駒場ベーシック前など市内数カ所で街頭から次のように訴えました。「1931年の満州事変に端を発する日中戦争、1941年の勃発の太平洋戦争と15年にわたる戦争で、2000万人を超すアジア諸国民と310万人以上の日本国民を犠牲にした戦争に日本が敗れ、降伏した日です。日本国民の犠牲者は、軍人やその関係者だけでなく、大都市をねらった無差別爆撃や非人道的な原爆投下によって多くの命と財産が奪われ、今なをその後遺症によつての被害が続いています。とりわけ戦争末期には「終結」の声があがったにもかかわらず、天皇をはじめとする上層部の意向で、各都市への大



空襲や沖縄での地上戦、広島と長崎への原爆投下など、失われなくともよい多くの人命が失われたことは見過ごしてできない事実です。このような事象の反省から、戦後、46年に公布された日本国憲法は前文に「政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起こることのないようにする」ことを高らかにうたいました。世界を友情と平和でつないだロンドン五輪も12日幕を閉じ、2014の国と地域からつどったトップアスリートたちの競い合いは連日、感動と興奮を呼びましたが、あの戦争は多くのアスリートと国民の命と感動を奪い去っていった暗い歴史があります。オリンピックは中止され、スポーツは戦争協力のみ、熱戦が続く甲子園野球大会も中止、多くの球児は出征し、南海の地や海のもくずと消えてしまいました。戦争の狂気はオリンピックとスポーツさえ翻弄し続けたのです。日本は、この侵略戦争の責任を問われた結果、終戦後の初めてのオリンピック、くしくもロンドン五輪ですが、参加を許されず、平和の祭典オリンピックへの出場は戦後7年目の昭和27年ヘルシンキオリンピックまでかかりました。日本共産党は、今後とも反戦平和と憲法9条が輝く平和日本への道を切り開くとともに世界の平和に貢献する新しい政治実現のためたたかいていくため全力を尽くす」と訴えました。



松浦奮戦モロ

消費増税法案が、ついに参議院でも民主、自民、公明の3党の賛成多数で強行可決、成立しました。この間、日本共産党など野党7党・会派は民意と公約に背く暴挙だとして反対してきました。また、世論調査を見ても6割近くが反対をしているにもかかわらず、密室談合でつくった法案を数の力で成立させたのですから、彼らなりの覚悟があつて強行したのでしよう。しかし、国民は、今回の法案成立の過程での民自公3党の密室談合をしつかり覚えていきます。現在の国民の暮らしや中小・零細企業の経営、さらには、東日本大震災で被災した人たちの暮らしを考えたらどうなるか考えるまでもありません。この怒りは選挙で返すしかありません。実施までに衆議院選と参議院選がありますから、二つの選挙で民自公に厳しい審判をくだして、消費税増税を阻止しましょう。

いざ東奔西走

戦後67年、終戦直前生まれのわたしの年ともダブリます。この時期は、戦争を風化させまいとドラマやドキュメンタリーなどの映像が国民に訴えています。その中の一つ「戦場の軍法会議」を視ました。これまで、あまり取り上げることのなかった軍法会議に光を当てた貴重なドキュメンタリーでした。戦争末期のフィリピン戦線は50万人が命を落とし、追い詰められた部隊で逃亡者が相次ぎ、軍によって次々と処刑したという。軍法会議の資料は焼却され実態は闇の中でしたが、一人の法務官中佐（裁判官出身）が資料と日記、証言を残していました。関係者が生きていた間は公開しない条件で、研究者に託したのです。「死刑にあたらずと思いつつながら認めた。英語のできた兵士が敵に内通するのを恐れた軍のでっち上げもあった。戦況悪化の中、裁判によらない処刑も認めた。」等々、戦場の「法の番人」を任じた中佐は軍に抵抗することはできませんでした。

しかし、残した資料は、無念の死を遂げた兵士たちの声を闇の中から、67年後によみがえらせ、生きることを許さない日本軍の理不尽に構造を告発しています。更なる追求を期待したい。

